京大芦生演習林を訪れて

小　林　直　正（同志社大学生物学研究室）

今から32年前，京大の大学院生の時に訪ねようとしながら果せなかったことがやっと実現した。32年前と今と比べられたらさぞ面白かったであろう。昔は二週に一回出る農学部のトラックに便乗しても入口の芦生迄で，長治谷へは歩かねばならなかったそうだ。今は車で直接行けるのだから，大変な違いである。また，京都から周山を回らなくても広河原から佐々里峠を通ればずっと近くなってもいる。これ程便利になったということは，開発が進んだためで芦生も決して例外ではなかったのだ。原生林もずい分減ったとのことである。

芦生をめざして広河原を経て，佐々里峠へさしかかると途端にブナが多くなり，天然杉も多数みられ山の深さが感じられた。私達の野外研究室である同志社の元山小屋，今の自然環境研究室（新心荘）周辺は広河原の手前からダンノ峠を経て廃村八丁へ至る中間にある。

そこにはブナは殆んどなく，二次林や植林が殆んどで，山の深さをあまり感じさせない所である。標高は佐々里峠とそう変りない筈であるが，この大きな違いには先づ驚ろかされた。殊に峠の黄葉の美しさは丁度よい時期に来たとしても全く比較にならない。また，道端に天然杉（芦生杉）の典型的な姿がみられ，これらのものは何れもカラー写真のよい対象となった。しかし峠を下った途中での道路工事はこれらの美しさにはそぐわない。それにより汚れた道沿いの渓流はバスの走行10万余を経ないときれいに澄まなかった。

芦生に一泊した翌朝はすばらしい快晴，いよいよ演習林内に入り，林道をマイクロバスで走る。途中標高700m位の所から内杉谷をみた。すばらしい眺めだ。

しかし植林した緑だけの所と自然林の多彩さとでは雲泥の差で，できれば植林などはなるべくして欲しくないものである。バスの走る間，様々な美しい景色が続く。所々で停車して眺めを楽しむ。すばらしい桂の大木，道沿に岩壁をつくっている地層の断面等々。京大の村田先生，渡辺先生をはじめとする専門家の解説付きで，すばらしい自然教室だ。やがて揚水発電所ができると出現するであろうダム湖の堰堤の予定地へ到着した。山並みの狭ばまった所であるが，その山肌（岩壁）は風化が進みボロボロで，半分崩れそうな感じがする。これで本当に堰堤を支えられるのか不安に思った。自然を破壊してダムを作っても何れは土砂で埋まるだろうし，本当にどこまで必要なものだろうか。最近の新聞報道によると，揚水発電所以外の夜間余剰電力備蓄の新技術が調査検討され，経済的に成立つといわれている。とすればここの発電所の建設を当面見送ってはどうであろうか。願わくばこの美しい自然を壊さないで欲しいものである。一度壊せばその復元は先づ不可能といえるだろうから。

長治谷の作業所（宿舎）へ着く。古いが仲々風情のある建物で，美しい自然の庭園の中にあった。さぞ四季折々の景色はすばらしいであろう。設備等の傷みは相当であったが，手入をして今後とも有効利用をはかってほしいものである。車を降り，徒歩で野田畑へ向う。山すそを通り，渓流を渡り，湿原を経て更に山すそを歩く途中，樹上に熊の作った円座がみつかった。昇った時の爪跡もくっきりしていた。周辺の樹下にはエビネ蘭があり，欲しいと思ったが，やはり自然に残しておくべきものだろう。

元きた方へ引きかえして長治谷へ戻ると，先程の周囲の景色が時間の経過によって異なった色合いを示していた。四季折々せめて，2，3日づつでも滞在したらさぞ美しい景色が見られるであろう。研究のテーマ，時間的余裕等の点で実現は無理だろうが，大いに心を引かれる所であった。更に演習林の入口へ帰る途中は，来るときと異なった方向から見ることにより別の美しい景色を楽しめた。

昔にくらべてはるかに便利になった現在，芦生は比較的容易に訪れられるようになった。だからこそ貴重な原生林を末永く保存してほしいものである。開発は勿論，植林も程々にして数少ない熊，カモシカなどのすみやすい所の一つとして残してはどうだろうか。開発を当り前のこととする最大の自然破壊者人間も実は自然の中の一員にすぎない。自然と共存して来た人間の心のふるさととしても大切な所ではないだろうか。